



上海交通大学との連携研究

連携に至るこれまでの経緯

上海第一医科大学（現在の復旦大学医学部）の教授でIGO（International Glycoconjugate Organization）の初代中国代表・陳惠黎(Chen Hui Li)博士に招待され、初めて上海を訪れたのは1996年、中国経済が大発展する以前です。当時、中国ではまだ本格的な糖鎖研究は始まっておらず、IGOに加盟したばかりでした。

2001年の産総研創設とほぼ同時に、NEDO糖鎖遺伝子プロジェクトが始まったとき、中国での今後の糖鎖研究を担う研究者を派遣してくれるよう陳惠黎教授に頼んだところ、6名の研究員が派遣されました。張延（Zhang Yan）博士は、日本滞在が16年におよび日本語がきわめて達者であったので、6名の中国人研究員の通訳係と、研究や生活面での世話係をお願いしました。2～3年ほど日本に滞在して帰国した彼らは、このプロジェクトで残した論文業績により、帰国後それぞれの地で大学教授などの職に就きました。張延博士も母校の上海交通大学（SJTU）において教授職を得ました。

その後、私は中国で発足した糖生物学学会に2008年に招待されたのをはじめ、その他の学会にも何回か招待され講演を行いました。2006年から始まったNEDO糖鎖機能活用プロジェクトには、IGOの第二代中国代表である復旦大学・顧建新(Gu Jian Xin)教授と張延教授にもプロジェクトメンバーとして参加してもらい、よりいっそう日中共同研究が盛んになっていきました。



上海交通大学で行われたAIST-SJTUの包括研究協力覚書調印式の集合写真

上海交通大学(SJTU)との包括研究協力覚書への道のり

2011年4月、上海郊外の閔行地区に開設されたSJTUの広大な新キャンパス内に、系統生物医学研究院（SCSB）が新設されました。中国全土から優秀な学生が集まるSJTUにおいて大学院生の研究指導を行うことになった私は、頻繁に上海を訪れるようになりました。基礎的な第1種基礎研究から実用化を目指す第2種基礎研究までの糖鎖研究領域をカバーして研究指導をしています。また、前述のNEDOプロジェクトがきっかけとなり、SCSB内に産総研糖鎖医工学研究センターの分室を開設し、私は正式にSJTUの顧問教授として、大学院生をつくばに留学させ技術指導を行いました。

2012年3月にはSJTUの張杰（Zhang Jie）学長が産総研を訪問され、同年6月には産総研の野間口前理事長がSJTUを訪問し、AIST-SJTUの包括研

究協力覚書が締結されました。写真はそのときの集合写真です。2014年2月には、産総研つくばセンターにて、AIST-SJTUの第1回ジョイントシンポジウムが開催され、さまざまな領域における共同研究の成果が発表されました。糖鎖研究領域では、主にバイオマーカーの開発が共同研究の成果であり、共著の論文発表や、中国における臨床応用への発展について討議が行われました。

今後、さらにSJTUから、大学院生やポスドクをつくばに留学させ、糖鎖研究の発展を担う人材教育を行うとともに、共同研究成果の両国における臨床領域への応用拡大を計画しています。

糖鎖創薬技術研究センター
招聘研究員
なりまつ ひさし
成松 久